

学会報告

第35回日本歯内療法学会学術大会報告

う蝕学分野 吉羽 邦彦
実行委員長

平成26年7月12日（土）、13日（日）の両日、第35回日本歯内療法学会学術大会（興地隆史大会長）が朱鷺メッセ・新潟コンベンションセンター（新潟市）にて開催されました。メインテーマ「新時代の歯内療法：エビデンスとアートの融和」のもと500名を超える参加者を得、活発な討論がなされました。

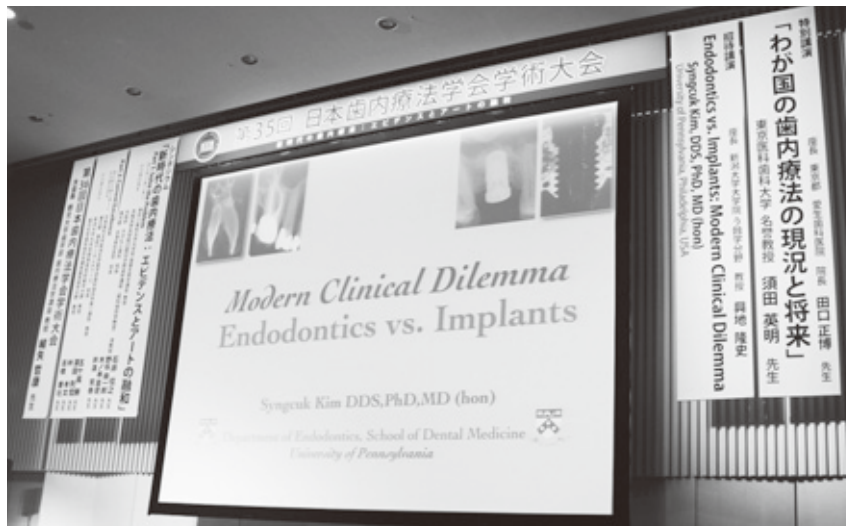
今回の学術大会では、特別講演、招待講演、シンポジウム、倫理セミナーのほか、一般口演、ポスター発表、テーブルクリニック、ランチョン・セミナーなどの盛りだくさんのセッションが設けられました。

大会初日の特別講演では、東京医科歯科大学名誉教授・須田英明先生にご登壇いただき、「わが国の歯内療法の現況と将来」と題してご講演いただきました。現在、極めて多くの症例が歯内療法の対象になっていること、また新規器材・材料・技術の導入が着実に進んでいること、さらに保

険制度の問題等について解説されました。また歯内療法＝根管処置ではなく、歯内療法の基本は生活歯髄の保護が重要であること、さらには歯髄再生療法の可能性についても示され、新時代の歯内療法がさらなる発展を遂げていくための方向性についてお話いただきました。

招待講演には、マイクロスコープを用いた歯内療法の第一人者である、Pennsylvania大学のSyngcuk Kim教授をお招きし、「Endodontics vs. Implants: Modern Clinical Dilemma」と題してご講演をいただきました（写真）。抜歯－インプラントという画一的なアプローチに警鐘を鳴らすとともに、先端的な歯内療法による天然歯保存の可能性を十分に検討すべきことを多くの症例を示しながら解説されました。また歯内療法とインプラント治療の双方の知識・技術を十分に学ぶことの重要性について強調されました。

本大会のシンポジウムは、テーマを「新時代の



歯内療法：エビデンスとアートの融和」とした二部構成とし、2日間に渡り開催されました。第一部「Solve the Problem」では、歯内療法の成功を阻み続ける因子あるいは難治症例に関連する、細菌感染、根管形態の複雑性、および再根管治療の困難性を取り上げ、これらに対する先端的な対応策について3名のシンポジストにエビデンスとアートの両面から解説いただきました。第二部「Current Excellence」では、歯内療法の発展に関する最先端のトピックとして、画像診断、Ni-Tiロータリーファイル、歯内歯周複合病変への対応、および根未完成歯のrevascularizationに焦点を当て、各方面で活躍されている4名のシンポジストにご講演いただきました。本セッションではシンポジストの一人として本学顎顔面放射線学分野・林 孝文教授に「歯内療法の画像診断」と題してご講演をいただき、歯科用コーンビームCT (CBCT) の歯内療法への応用に関するエビ

デンスとガイドラインについて解説していただきました。

大会二日目に開催された倫理セミナーでは、本学予防歯科学分野・宮崎秀夫教授にご登壇いただき、「臨床研究に必要な倫理的配慮」と題してご講演いただきました。臨床研究への倫理的配慮の意義と重要性について詳細に解説していただきました。

一般口演、ポスター発表ならびにテーブルクリニックにおいても活発な討論なされ、盛会のうちに終了いたしました。新時代の歯内療法へと繋がる情報発信と情報交換の場となった大会であったと思います。

最後となりましたが、本学術大会開催にあたりご後援・ご助成いただきました新潟大学歯学部同窓会、新潟県歯科医師会、新潟市歯科医師会をはじめ関係各位に改めまして御礼申し上げます。



第32回 日本小児歯科学会 北日本地方会大会 および総会 開催報告

小児歯科学分野 齊 藤 一 誠
準備委員長

この度、平成26年10月18日（土）に第32回 日本小児歯科学会 北日本地方会大会および総会を新潟県歯科医師会館において開催させていただきました。当分野教授 早崎治明 先生が大会長、私は準備委員長として、開催準備にあたりました。歴史と伝統のあるこの地方会大会を新潟大学 大学院医歯学総合研究科 小児歯科学分野が担当させていただきましたことを、大変光栄に感じております。

大会のテーマを「小児歯科におけるリスクマネジメント」といたしまして、教育講演では、本学大学院医歯学総合研究科 歯科麻酔学分野教授 瀬尾憲司 先生に「大人の危機管理から見た小児歯科治療の安全性」、特別講演では、日本大学歯学部小児歯科学講座教授 白川哲夫 先生に「小児歯科におけるリスクマネジメントの変遷」という演題でご講演をいただきました。お二人の先生方のご講演は、会員の皆様からとても好評で、小児歯科医療における安全の確保と、これまでの、そしてこれからのリスクマネジメントの取り組みについての理解を深めることができました。衛生士セミナー：認定衛生士必須地方会セミナーでは、「小児のお口のスペシャリストになるためには」とのテーマで、九州看護福祉大学 口腔保健学科 筒井睦 先生にご講演いただきました。筒井先生は当分野にて学位を取得されたご縁もありまして、熊本県より遠路はるばるお越しいただきました。東北大学大学院 歯学研究科 小児発達歯科学分野 福本敏 教授には、ランチョンセミナーにて「う蝕予防の新しい考え方～明確な目標を持ったアプローチとは～」と題してご講演いただきました。

また、日本小児歯科学会専門医認定委員会よりご配慮いただき、大会直後に専門医・認定医セミナーを併催させていただきました。「乳幼児の口と歯の健診ガイド」学会編ができた経緯と解説と

題して、丸山進一郎 先生（アリスバンビーニ小児歯科）、暖かい視線で、社会が求める乳幼児健診に取り組みましょう！-「食」を介した歯科からの育児支援も考えてみませんか-と題して田中英一先生（田中歯科クリニック）にご講演賜りました。

さらに、一般口頭発表、ポスター発表、専門医・認定医更新発表、認定衛生士試験発表で28演題、参加者は230名と盛会裏に終了することができました。

会員懇親会では、新潟大学歯学部長 前田健康教授、私の前職での恩師でもあります日本小児歯科学会 理事長 山崎要一 先生（鹿児島大学小児歯科学分野教授）、新潟県歯科医師会 会長 五十嵐治 先生、新潟市歯科医師会 会長 岡田匠 先生、全国小児歯科開業医会（JSPP）会長 丸山進一郎 先生にもご来席いただき、ご祝辞を賜りました。また、北日本地方会管轄の7大学の小児歯科による医局紹介を行うなど、大いに盛り上がりました（写真）。

このような大会を開催できたのも、新潟臨床小児歯科研究会の先生方、そして新潟大学小児歯科学分野の医局員の先生方のご協力の賜物と、改めて関係者の皆様に感謝申し上げます。



懇親会会場にて（筆者：上段左端）

平成26年度日本補綴歯科学会 関越支部学術大会開催報告

医歯学総合病院 歯科総合診療部 奥村暢旦
準備委員長

平成26年9月23日秋分の日、秋晴れの下で平成26年度関越支部総会・学術大会（大会長・藤井規孝（新潟大））がチサンホテル&コンファレンスセンター新潟にて開催されました。新潟で開催される際は会場として新潟県歯科医師会館をお借りすることが多い本学会ですが、今回はできるだけ多くの会員の先生方に参加していただきたいという小出馨支部長（日歯新潟生命歯学部）の御意向により、新潟駅に隣接しており新潟市外からも比較的アクセスしやすい本会場を選択したことで参加者は80名を超え、例年になく盛況な会となりました。学術大会は当日午前中という限られた時間ではありましたが、一般口演5題、専門医申請ケースプレゼンテーション1題の発表が行われ、補綴に限らず教育・理工・解剖・顎関節と非常に幅広い内容を網羅しており、活発な質疑応答が行われました。特別講演では小林博准教授（新潟大）に「生体計測と補綴 デジタルとアナログ」と題して、デジタルとアナログの概念に始まり、アンプやペンレコーダーを用いていた頃と現在の筋電図の信号処理の仕組みや補綴研究の評価、デジタルからネットワークへの広がりなど、大変興味深い講演を頂き、補綴・歯科の分野に留まらない見識の深さを拝聴することができました。

同日に「これからの顎口腔系のリハビリテーションに求められるもの」というテーマの下、支部専門医研修会も併催され、鶴見大学の小川匠教授より「加齢による顎顔面形態の変化に対応した歯科診療とは」の演題で、残存歯数が増加した一方で多様化した歯列形態の変化や顎顔面形態の変化と、それに応じた咬合や機能の回復について解説頂き、広島大学の津賀一弘教授には「舌圧を指標とする新しい口腔機能リハビリテーション」と題して、高齢者のQOL向上に不可欠であるにもかかわらずモチベーション維持の難しい口腔リハビリテーションにおいて、簡便で客観的な検査法とそれをもとに効果的に口腔機能を鍛える訓練についてご講演頂きました。

日本補綴歯科学会関越支部は、新潟、群馬、栃木の三県に在住する補綴学会員で構成されておりますが、今年度は県外から多数の先生方が御参加下さっただけでなく、それぞれの講演について積極的に質疑応答が行われ、おかげさまで大盛況のうちに会を終えることができました。この場をお借りして、御協力いただいた関係各位およびチサンホテル&コンファレンスセンター新潟斎藤様に御礼申し上げます。



開会の挨拶をされる藤井大会長



一般口演の様子